

その人らしい最期のために私達ができること ～アルカディア入所での終末期ケアをとおして～

施設名 : 介護老人保健施設 アルカディア
発表者 : 看護師 五十嵐京美
協力者 : 大城康孝 宇江城恵子

【はじめに】

アルカディアは、老健施設の役割である在宅復帰を積極的に行うとともに、ショートステイベッド10床を常時確保し、在宅支援に力を入れている50床の老健施設である。

しかし、開設時に比べ利用者の高齢化とともに重度化してきた利用者を、在宅で介護する事が困難となり在宅介護を断念した長期入所者の相談が多くなり、アルカディアで終末期を希望する利用者が増えてきた。

その中で昨年の4月～11月の8ヶ月間で、6名の利用者を看取った。症例をとおして今後の課題がみえてきたのでここに紹介する。

【症例内訳】

症例の内訳として、男性2名、女性4名、年齢は、74歳～106歳で平均年齢は93歳、平均介護度は、4.6となっている。入所時の主な疾患として脳梗塞後遺症の方が4名、慢性心不全1名、肝臓癌1名であった。

【終末期の経緯】

アルカディアでの終末期利用の経緯として、長期入所中で終末期を迎えた方は4名で、当初から積極的な延命処置は行わず施設で終末期を迎える事を希望していた方達である。末期癌で終末期を迎えた方は、併設病院からホスピス転院待ちでアルカディアに入所するが、転院を待たずして施設で家族に看取られながら終末期を迎えた。家族は当初老健入所については、ホスピス転院待ちの間の利用という気持ちであったが、結果的に老健で看取った事に対し満足し感謝されていた。心不全の利用者は、もともと当法人の在宅サピス利用者で、症状からして急性期病院の対象ではない為退院となるが、在宅での介護は厳しいと、本人、家族の希望でアルカディアでの終末期を希望し、併設病院から入所となる経緯があった。

【終末期の体制】

症例の終末期ケアの関わり方として、家族へ症状説明後、終末期をどう迎えたいかの確認を行い同意を得る事から始まる。次に本人の状態を診ながら利用者、家族がおだやかに過ごせる部屋の確保を行い終末期の環境を整えていく。また家族は、さまざまな不安を抱えている場合

が多く、ケアにあたる看護、介護の担当者は、家族の声を常に聴き取り不安材料が少しでも解消できるように、他職種と情報を共有し対応していく。

夜間や週末は、施設医とオンコ-ル体制でいつでも連絡可能にし常時かけつける体制だが、施設医の出張や緊急時の施設到着までの間、併設病院医師が対応できる協力体制をとっている。

【問題点】

実際に現場で対応する職員は、看護だけではなく介護職員も携わる事が多いが、終末期ケアに対する知識、技術不足に対する不安が強く介護職に関しては慣れた職員の対応となる場合が多かった。

また看取りの環境を整える為の居室の調整は、酸素設置の部屋、ステ-ションに近い個室の調整など相談員と現場職員の情報共有が大切で、タイミングをみながらの移動となるが予期せぬ状態悪化で居室調整が後手になる場合もあった。

終末期を迎える利用者の家族は、キ-パ-ソン以外の家族の介入や、初回の延命処置拒否の気持ちが揺らぐ事があり、確認と同意の手順を何度か行う事もあった。職員は家族の思いや声を常に聴きとる力が必要とされているのを感じた。

終末期の利用者の看取りが近くなると夜間帯の通常職員配置では、他利用者のケア対応が厳しく、勤務調整が必要で急な勤務変更が多くなるという問題点などが生じた。

このような現場での問題点とあわせて、終末期ケアについて、職員への意識調査も確認する事ができた。

【方法】

看護職6名、介護職16名、支援専門員1名、相談員1名の計24名にアンケート調査を実施。
回収率 100%

【結果】

1. 老健での終末期ケアについて
ほとんどの職員は、必要だと思っているが、老健の役割ではないという考えもあった。
2. 終末期ケアの職員対応について
終末期ケアは実際行っているが、満足したケ

アが提供できたと思っている職員は3名で、21名の職員は、不安や自信のないまま対応している現状であった。

3. 今後の終末期ケアについて

終末期ケアが増えていく現状を受け止め今後必要であれば22名の職員が、対応していきたいという強い思いがあった。

4. 今後の終末期ケアに必要なのは？

重複回答の職員が多く、終末期のマニュアル作り、勉強会の開催、環境と職員配置の整備などがあげられた。

【今後の課題】

利用者や家族の皆様には、「アルカディアでよかった」と思える終末期ケアの提供ができる為に、また職員にとっても「尊厳を持ったケアが提供できてよかった」といえる為に、今後施設として取り組むべき事が明確になってきた。

看護、介護職共同による終末期のマニュアル作成を行い適時に適切な対応ができる事、定期的な勉強会の開催で、知識、技術が向上し職員が統一した終末期ケアの提供が出来る事、利用者と家族がおだやかに過ごせるよう適時に個室の確保をする事、状況に応じて夜間の職員勤務調整を随時行う事、また家族の声を聴く事で、揺れ動く家族の思いをしっかりと受け止め支える事ができる職員の育成などが、課題としてあげられる。

【まとめ】

今回のアンケート調査を行う事で、終末期ケアについて職員全体で見つめなおす良いきっかけとなった。

終末期ケアは、利用者、家族と職員との信頼関係から始まり共に看取りを行う。今回6名の家族の方から、老健での終末期ケアに対し穏やかに見守り、安心して付き添う事ができたと感謝の声をよせていただいた事が、職員にとって大きなはげみとなった。

これからも利用者の尊厳を尊重し「その人らしい最期」を迎えていただく為に、私達に何ができるのか、利用者、家族と共に考えていきたい。